

長崎北病院 伝言板 8月号

令和3年8月1日発行

8月。葉月。木の葉が紅葉して落ちる月「葉落ち月」から「葉月」。旧暦では葉月は9-10月のことですから夏ではなく秋なのです。でも実際は雑草の葉が繁り、草刈りに追われる「葉月」の方が実感です。暑い。熱中症。ヘタばらないように。



オリンピック・Olympic・Tokyo2020

オリンピック開幕。賛否はあれど、始まってしまえば頑張る選手の姿には感動と応援しかない。頑張れ!!

本来の力を出せる人、重圧に沈む者、彗星のように出てくる選手。悲喜交々(ひきこもごも)。なれどアスリートは全力を尽くす。結果がどうであれ拍手するしかない。お疲れ様。ありがとう。

スケートボード、サーフィンなどオリンピックでは初めて見る競技もある。若い人が軽やかに、楽しそうに躍動する。

スケートボード女子では優勝は13才。決勝8人中4人が16才以下、6人が20才以下。金銀銅の3人合わせて42才(平均14才!)

若くても臆する様子はない。競技を始めると小さな13才が堂々と見える。大きくなってから始めると転倒の痛さ、怪我の怖さが先に立つ。小さい時は転倒する恐怖を知らず、痛さより滑走する楽しさが勝る。周囲の協力はあるだろうが小さな時から日本中の仲間と交流し、軽々と国境を超えて切磋琢磨する。ティーンエイジャー恐るべし。若いことはそれだけで強さでもある。経験と努力を重ねた人の活躍もまた心を打つ。柔道女子78キロ



で圧倒的な強さで優勝した浜田尚里選手、30才。柔道の日本選手最年長。若い頃はエリートではなかった。小学4年で柔道を始めたが「真剣にやっていなかった」。高校入学後、当時の監督が「器用ではないが一つのことを始めたら徹底的にやる」と見抜き、努力で身に付く寝技の稽古に打ち込んだ。それでも高校3年の高総体では開始6秒で負けた。しかし、大学、自衛隊と自らのペースを乱さず着実に階段を上った。そして「金メダル」。五輪前の国際大会で優勝した時、「ベテランらしい、安定した勝ち方でしたね」とのお祝いのメールに、「ベテラン感出ていますか? まだまだ強くなるので見ていてください!」と返したという。努力は嘘をつかない。まだまだ究めゆく途上。



ソフトボール。迫力がある。選手の間が近い。球も速い。鍛えられた選手の肉体、技術も半端ない。圧倒されました。野球のように注目されることもなく、活躍の場も少ない。オリンピックに懸ける意気込みが違う。真剣勝負がひしひしと伝わる。叱られるかもしれないが、オリンピックの野球のまったりとした緩さが草野球に見える。その場にかかる必死さの差であろう。2008年の北京オリンピックで日本は優勝した。その時のエースが上野由岐子。米国のエースがモニカ・アボット(35)。しかしその後オリンピックでは競技自体がなくなった。13年ぶりの舞台。米国がリベンジを挑んだが上野由岐子が再び立ちはだかった。今回も惜敗したモニカ・アボット(35)が上野について。「競争心が強く、集中力も並外れています。最高だと思っは、彼女が常に生まれ変わり続け、進化していくところです」。そして上野は言う。アボットがいたから頑張れた。この13年アボットは日本ですっとソフトボールを続け日本の進化を支えていた立役者でもある。人の出会いは響き合い進化する、努力は感動を呼ぶ。(A.S.)

